



藤前干潟

国指定 鳥獣保護区

ラムサール条約登録湿地



環境省

〈連絡先〉

環境省中部地方環境事務所

〒450-0001 愛知県名古屋市中区三の丸2丁目5-2

TEL 052-389-2877 FAX 052-389-2878

URL <http://chubu.env.go.jp/>



環境省名古屋自然保護官事務所

〒455-0845 愛知県名古屋市港区野跡4丁目11-2

TEL 052-389-2877 FAX 052-389-2878

メール WB-NAGOYA@env.go.jp

URL <http://chubu.env.go.jp/wildlife/fujimae/about/index.html>



干潟の生態系イラスト提供：NPO法人藤前干潟を守る会
写真提供：名古屋市野鳥観察館 指定管理者 東海・稲永ネットワーク

発行者：環境省 発行年：2020年（改訂：2024年）



鳥獣保護区とは

藤前干潟
(愛知県)

鳥獣保護区は、鳥類や獣(けもの)を保護するために、「鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律」に基づいて指定されます。

鳥獣保護区は、国(環境大臣)の指定する国指定鳥獣保護区と、都道府県(知事)の指定する都道府県指定鳥獣保護区の2種類があり、藤前干潟は、国の指定する鳥獣保護区です。

鳥獣保護区の区域内は、狩猟は禁止です。また鳥獣やその生息地の保護を図るため特に必要があると認める区域を特別保護地区に指定することができます。特別保護地区内では一定の開発行為が規制されます。

藤前干潟では、稲永ビジターセンターと藤前干潟活動センターの前の干潟が特別保護地区に指定されています。

藤前干潟の特徴

藤前干潟は、伊勢湾最奥部に位置し、庄内川・新川・日光川の3つの河川が流れ込む河口部に広がる自然干潟です。港湾施設や工場、農地などで埋め立てられ、わずかに残った干潟が、名古屋市のゴミ処分場として埋め立てられることになった際、干潟を守れと市民が立ち上がった結果、藤前干潟は保全されました。藤前干潟は、シギ・チドリ類の東アジア・オーストラリア渡りルート上における中継地として重要な場所となっており、渡り鳥の飛来地として特に有名です。また、河川沿いに広がるヨシ原では草原性の鳥類や干潟の魚として知られるトビハゼ、多くのカニ類、貝類が生息しています。このように、多様な自然環境を保つ藤前干潟は、2002年11月、環境省により鳥獣保護区に指定され、このうち干潟を含む中心部分が特別保護地区に指定されました。さらに、特別保護地区は、同年同月、下記の3つの点から国際的に重要な湿地としてラムサール条約に登録されました。

藤前干潟に適用された国際登録基準*

基準2. 絶滅のおそれのある種や群集を支えている湿地
基準4. 動植物のライフサイクルの重要な段階を支えている、または悪条件の期間中に動植物の避難場所となる湿地

基準5. 定期的に2万羽以上の水鳥を支えている湿地

*ラムサール条約湿地は、9つの選定基準とガイドラインによって定められる。



ラムサール条約とは

ラムサール条約は、1971年2月2日にイランで開催された国際会議で条約です。正式名称は、国際的に重要な湿地に採択された都市の名前に条約と呼ばれています。

条約を締結した国は、条約で定められた国際的な基準に従って(自国の湿地を)指定し、条約事務局が管理する「国際的に重要な湿地に係る登録簿」に掲載します。これが「ラムサール条約湿地」です。藤前干潟は、鳥獣保護区に指定されたのと同じ年(2002年)に特別保護地区の範囲がラムサール条約に登録されました。

ラムサール条約では、3つの基盤となる考え方があります。

湿地の「保全・再生」と「ワイズユース(賢明な利用)」、これら促進する「交流、学習(CEPA)」。

ワイズユース
(賢明な利用)

湿地の生態系を維持しつつ、湿地から得られる恵みを持続的に活用する



保全・再生

水鳥の保全だけでなく、人の生活を支える生態系として幅広く保全・再生を呼びかける

交流、学習
(CEPA)

保全や賢明な利用のために交流、能力養成、教育、参加、普及啓発を進める

干潟ってどんなところ？



干潮時

満潮時

皆さんは、潮干狩りに行ったことがありますか？どんな場所だったか想像してみてください。海岸線から数キロ先にまで広がる泥の平原、長靴だけでは、足がはまって抜けないような場所もあるかもしれません。このように、ある時間帯には泥の平原が広がる場所も、また別の時間にやってくる、そこは一面、海になっていることがあります。これは、海の大きな流れ「潮汐(ちようせき)」によって起こる自然現象です。この潮汐に伴って、浅瀬では海底が現れたり、沈んだりする現象が起こります。この時現れた海底、広大な泥の平原が、「干潟」と呼ばれる場所なのです。干潟は、潮汐の影響を受けるため、1日に2回の干出と水没を繰り返します。

環境省調査*による干潟の定義

- 1 高潮線と低潮線に挟まれた干出域の最大幅が100m以上であること。
- 2 大潮時の連続した干出域の面積が1ha以上であること。
- 3 移動しやすい底質(砂、礫、砂泥、泥)であること。

*干潟分布調査(現存干潟)

陸に住む生きもの

干潟には170種類を超える鳥類が生息しています。春と秋には渡り鳥のハマシギやホウロクシギ、夏にはウミネコやササゴイ、冬にはヒドリガモやオナガガモが見られます。また猛禽類のミサゴや集団で狩りをするカワウ、真っ白な背の高いダイサギなどは年中見ることができます。

ササゴイ

アオアシシギ

ホウロクシギ

ダイサギ

オナガガモ

ヒドリガモ

マガモ

海に住む生きもの

長い目特徴の干潟のカニ、ヤマトオサガニやチゴガニ、皮膚呼吸とエラ呼吸をする準絶滅危惧種のトビハゼのほか、ニホンウナギやヤマトシジミなどたくさんの生きものに出会えます。

アナジャコ

ヤマトオサガニ

トビハゼ



ニホンウナギ



ヤマトシジミ



アシハラガニ



植物

藤前干潟の代表的な植物はヨシです。イネ科の植物で夏には2~3mに成長し、多くの生きものすみかになります。ヨシ原の根元には塩分のある水でも生活できるシオクワなどの塩性湿地の植物や海浜植物のハマヒルガオも一部で見られます。

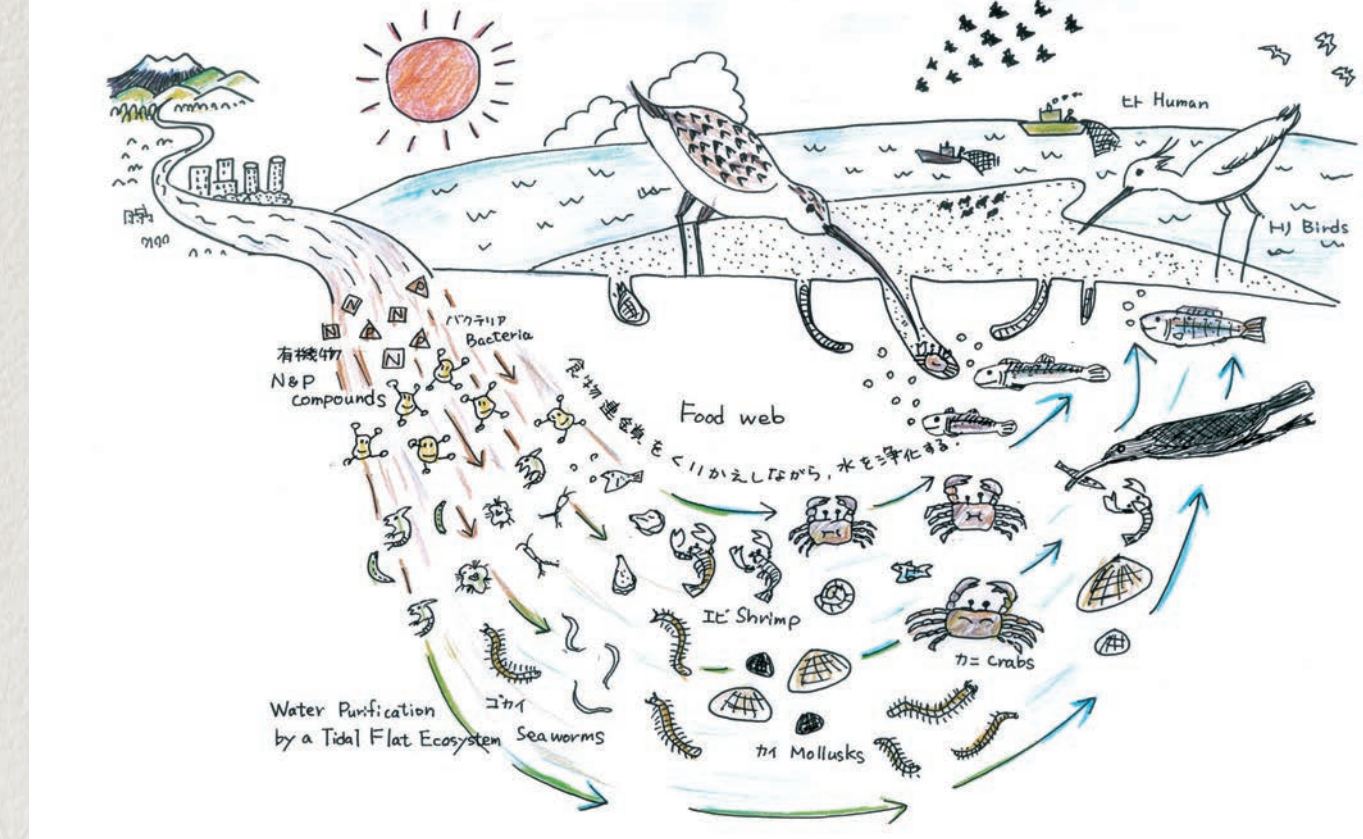


ハマヒルガオ

ヨシ

干潟の生態系

~水をきれいにし、命をはぐくむ~



藤

前干潟に流れ込む庄内川・新川・日光川の3本の川には、リンやチッ素などの栄養分や生きものの死骸、落ち葉などの有機物がたくさん含まれているため、海の植物プランクトンの栄養源となります。また、干潟で、アナジャコをはじめ、シジミやカニ、ゴカイなどの底生生物がこれらを食べて水を浄化します。干潟上には底生生物の巣穴が無数にあり、この巣穴から海水中の新鮮な酸素が泥中へ供給され、干潟の環境を良くしています。そして、藤前干潟には底生生物を食べる渡り鳥や、魚類などが集まります。豊富な

底生生物の存在は、多様な生物の営みを支えているのです。ところが、ひとたびこのバランスが崩れてしまうと、植物プランクトンの大量発生による「赤潮」や、ヘドロが溜まり海底付近の酸素が消費されてしまう「貧酸素」など様々な問題が発生し、自然環境の劣化という悪循環が生まれてしまいます。干潟は、水をきれいにすると同時に多くの生きものたちの命をはぐくむ大切な場所となっているのです。

取り組み

1

藤前干潟のことを知ってもらおう

出前講座や自然観察会

藤前干潟を管轄する環境省名古屋自然保護官事務所では、たくさんの方に藤前干潟を知ってもらうため、「レンジャー写真展」や各自治体、市民団体などと協力イベントを開催しています。また、名古屋市内の小学校に出向いて藤前干潟について楽しく学習してもらう「出前講座」などを実施しています。そのほか、藤前干潟では、市民団体による自然観察会なども実施しています。



出前講座の様子

取り組み

2

藤前干潟をみんなで守る

環境保全活動への協力



(例) 藤前干潟クリーン大作戦
藤前干潟では、市民をはじめ多くの団体が構成する藤前干潟クリーン大作戦実行委員会が、年に2回、大規模な清掃活動を行っており、環境省職員も活動に協力しています。

藤前干潟協議会

藤前干潟の普及啓発や保全活動に意欲のある方なら誰でも参加できる協議会です。藤前干潟鳥獣保護区で行われる公共工事や藤前干潟の環境に関する課題などを共有し、どのように保全と活用を推進していくのかを話し合う場となっています。





自然体験 干潟に入れる場所

春から夏にかけては藤前干潟の面積は大きく広がります。この頃になると、藤前干潟では干潟に入りやすくなるため、体験プログラムが様々用意されます。これらのプログラムでは実際に干潟の泥を肌で感じるだけでなく、泥の中に生息する生きものたちを間近で観察できます。

魅力

夕日スポット

藤前干潟は、河口部が西方角に開けているため、夕方には美しい夕日が遠くの山地や海へ沈んでいく姿を眺めることができます。名古屋港西大橋（通称、トリトン）から鈴鹿山脈にかけての夕日の沈むポイントは、時期によっては、飛島ふ頭に立ち並ぶ大きなキリン（コンテナを運ぶガントリークレーン）がシルエットとなって浮かび上がり、大都会名古屋に残された藤前干潟を実感することができます。

渡り鳥の飛来地

藤前干潟は、特に渡り鳥の飛来地として有名で、春と秋にはハマシギをはじめとする多くのシギ・チドリ類、冬になるとカモ類がたくさん飛来します。広く出現した干潟で食事をしたり休憩したりする鳥類の姿は、季節の折々で訪れる人を楽しませてくれます。また、飛来する鳥類には希少種も含まれるほか、サギ類やカウなど年間を通じて藤前干潟を利用する鳥も多く見られます。



藤前干潟は、大都会を支える物流港・名古屋港の中に残された貴重な自然干潟であり、また貴重な動植物に出会える場としても大切な場所です。例えば、とても長い嘴が特徴的なホウロクシギ^{※1}や、空をふわふわと舞うように飛ぶズグロカモメ^{※2}のほか、通年で観察されるミサゴ^{※2}や干潟の魚として愛らしい姿が人気のトビハゼ^{※2}など。

※1 環境省レッドリスト：絶滅危惧Ⅱ類
※2 環境省レッドリスト：準絶滅危惧種

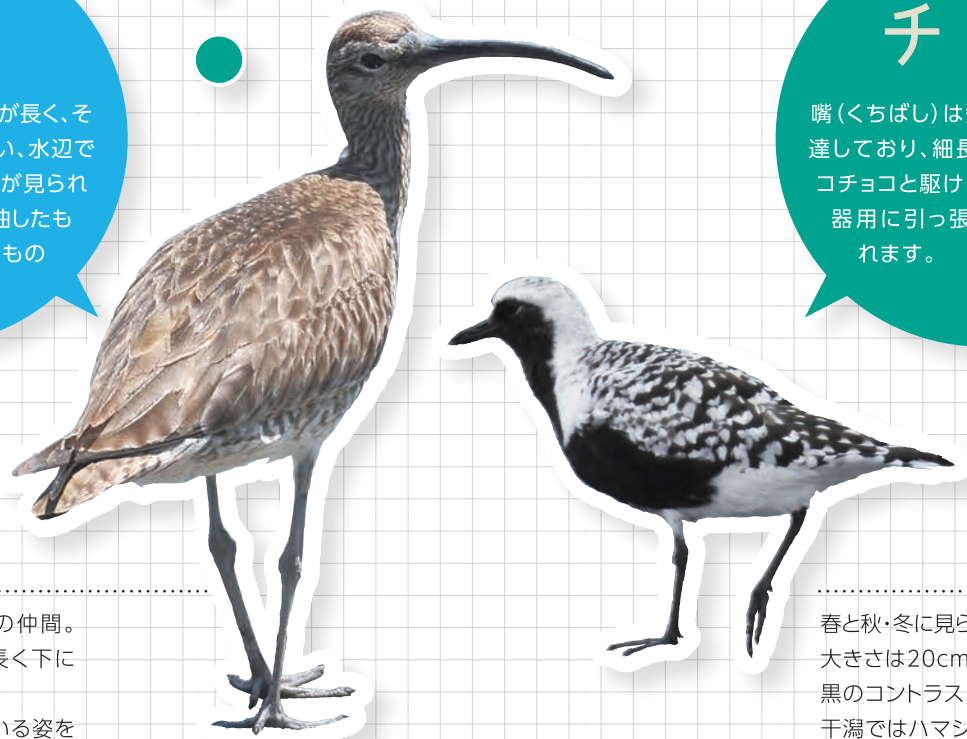
貴重な動植物に出会える場所



シギ・チドリって どんな鳥？

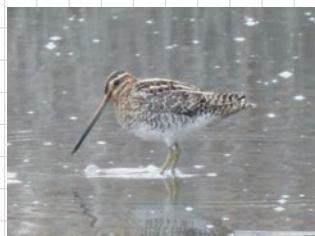
シギ

基本的に嘴（くちばし）と脚が長く、その特徴的な嘴を器用に使い、水辺で貝や魚などをついばむ姿が見られます。嘴は大きく下に湾曲したものや、上に反っているものもあります。

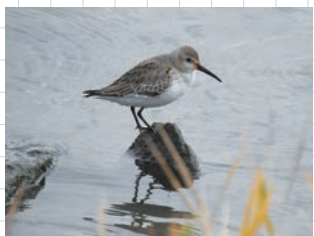


チュウシャクシギ

春と秋に見られるシギの仲間。大きさは40cmほど。長く下に湾曲した嘴が特徴。干潟ではカニを食べている姿をよく見ることができる。



ダシギ



ハマシギ



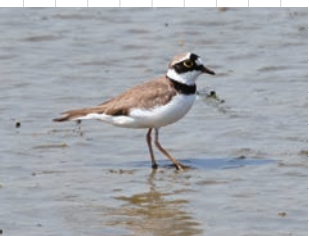
ケリ

チドリ

嘴（くちばし）は短く、比較的目的が発達しており、細長い脚で水辺をちょこちょこと駆け回り、ゴカイなどを器用に引っ張り出す姿が見られます。

ダイゼン

春と秋・冬に見られるチドリの仲間。大きさは20cmほど。夏羽は、白と黒のコントラストが鮮やかになる。干潟ではハマシギなどの群れに交じってエサを食べている姿を見ることができる。

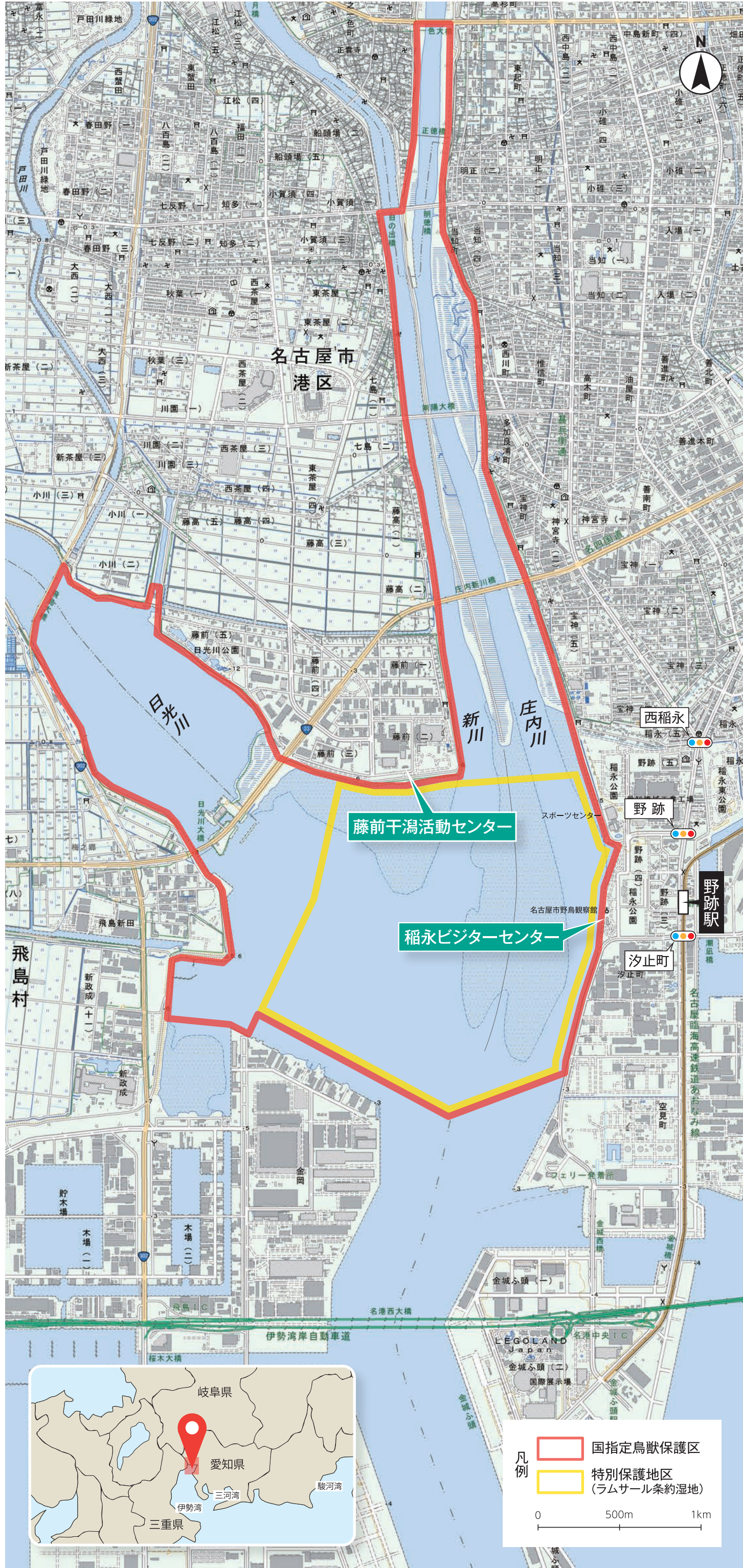


コチドリ



渡りのルート

シギ・チドリ類は、繁殖地であるシベリアやアラスカなどから冬を過ごす越冬地のオーストラリアなどを行き来する途中に日本に立ち寄るため、日本では春と秋に多く見られます。片道約1万キロとも言われる距離を移動するため、日本などの中継地でたっぷり食べて栄養を蓄えます。



※電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成

干潟のマナー

多くの方に楽しく利用していただくため、干潟内では自然を大切にすることを心がけ、次のことを守ってください。



ゴミを捨てない（ポイ捨てしない）。出したゴミは持ち帰る。



採集した生きものは、観察したら元の場所に戻す。



干潟に入る時は、生きものの住処に入ることを意識し、どかした岩などは元に戻す。



カメラ撮影の時には、生きものに配慮し、近づき過ぎない。



足元の小さな生きものや巣穴を踏みつけない。



施設案内

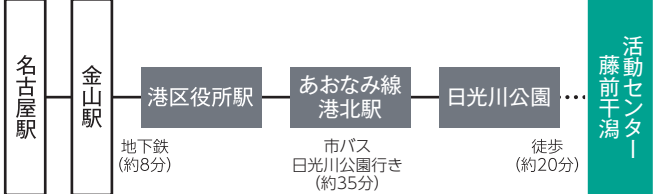
藤前干潟活動センター



TEL 052-309-7260 FAX 052-309-7261
愛知県名古屋港区藤前2丁目202

P 駐車場あり

〈アクセス〉



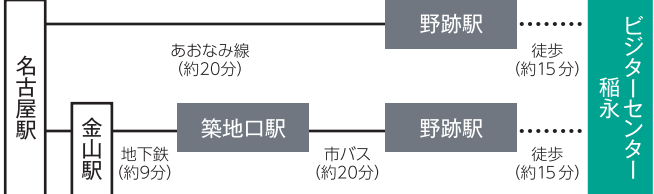
稲永ビジターセンター



TEL 052-389-5821 FAX 052-389-5822
愛知県名古屋港区野跡4丁目11-2

P 駐車場あり（稲永公園）

〈アクセス〉



開館時間 午前9時から午後4時30分
休館日 毎週月・火曜日（※月、又は火曜日が祝日の場合、翌日以降の平日（月火が祝日の場合は翌日以降の2日間）が休館日）
年末年始（12月29日から1月3日）
入場料 無料（団体利用については事前予約が必要です。）